

極上エリートの甘すぎる求愛に
酔わされています

～初恋未満の淡い恋情は愛へと花開く～

櫻屋かな

Kanna Sakuraya



Eternity
BUNKO

目次

極上エリートの甘すぎる求愛に酔わされています
ゝ初恋未満の淡い恋情は愛へと花開くゝ

5

書き下ろし番外編

散歩に行こう

325

極上エリートの甘すぎる求愛に

酔わされています

ゝ初恋未満の淡い恋情は愛へと花開くゝ

第一章

「どこがいい？ イタリア？ フランス？ 中国？ ……それともインド？」

そう囁くと、私の隣に立つサラリーマンはにこりと微笑んだ。

まるで旅行先を決めかねているかのようには聞こえるけど、ここは酒屋。断じて旅行代理店ではない。

「せっかくだから、海外旅行に行く気分だね」

「え、いや……」

カウンターに並べられているのは、名刺大の飲み屋のシOPPカード。その数、八、じゃない九件も。好きに選んでいいんだと言われても、そう簡単に決められるものではない。私は救いを求めるように、カウンターの向かいに立つ店主に視線を移した。

「イタリアンにフレンチに中華にカレー……。確かに店だけで世界一周できそうだ。けど、基本に戻って和食とかもどうです？」

四十代と思わしき酒屋の店主はすっかり乗り気で、さらに所狭しとシOPPカードを

並べていく。

「お勧めはどれ？」

「ここのおでん屋は良いですよ。カウンターだけの小さなお店ですけど、料理も美味いし店の雰囲気もいい」

「カウンターだけか。それだと、会話が筒抜けになっちゃって二人でゆっくり話せないよね」

ね？ って彼は満面の笑みでこちらを振り向いて、同意を求める。そんなイケメンの圧に押され、平凡OLな私は意味もなく、お、おう、とか言いながらうなずいた。

いやなんでこんなことに……

それはほんの三十分ほど前に遡る。私と彼はこの街の酒屋の一角で、再会をしたのだった――



金曜日、十七時半過ぎ。九月初めのこの時間はまだうつつすら明るくて、金曜日ということもあり少し心が浮き立ってしまう。勤務を終え特に用もない独身女は、会社を出た後は家に帰るのみ。このまま真っ直ぐ進めば駅なんだけど……

行っちゃおうかな。

心の中でうなずいて、一本横道に進路を変えた。駅へ向かう道なのは同じだけど、裏通りというだけで雰囲気が変わる。住宅と店舗が混ざり合う街並みを横目に、私はとある酒屋を目指す。

店の前の駐車スペースには軽トラックが停まっっていて、その横にビールケースが積まれている。そんなどこにもあるような、街の酒屋さん。

ガラス越しに見える店内は日の光が入らない壁沿いにショーケースが並び、かなりの種類の日本酒が揃っている。入り口の自動ドアの横には『鈴木酒店』と店名が白く抜かれた藍染めの布がぴんと張られていて、足元にはこの酒屋がただの酒屋ではないことを示す看板が、さり気なく置かれていた。置き型移動式の看板に貼られた白い紙に毛筆で書かれている言葉は、「角打ち始めました」。

角打ち。

私がこのお店に寄る理由がこれだ。

初めてこの店の前を通ったとき、看板に書かれた角打ちというのがなんなのか分からなかった。ショーケースの反対側の壁がカウンターとなっていて、立ち呑みコーナーになっているのは目についた。帰りの電車の中、スマホで意味を調べて分かったのは、その立ち呑みスペースが角打ちと言われるものということ。

飲み屋ではない、酒屋の一杯毎の酒小売り。なのでお通しなんて無くてツマミは基本、店で売られている乾き物。バーテンダーではなく酒屋のおじちゃんが対応する。その気楽さと素っ気なさがいいな、と思った。

三十一歳の独身女の画的に相応しいのは小洒落たワインバーかもしれないけど、街の片隅の酒屋で日本酒一杯引つ掛ける方が、私的には落ち着くのだ。

会社から駅までの道すがらにある酒屋さんに寄り道して、一杯だけ立ち呑みして十分くらいでさくつと帰る。これが最近の私のお気に入りだった。

いや、流石にそうしょっちゅうやるのはどうかと思うので、二週間にいっぺんくらいを目安にね。

「いらつしゃーい」

店主の気の抜けた声に迎えられ、カウンターに向かう。

「すみませーん。角打ち、いいですか？」

「はいよー」

品出しをしていた店主に声を掛けると、作業を中断してこっちにやって来てくれる。

店主はカウンターの下にしまっているクーラーボックスを取り出して、そこから日本酒の四合瓶を六本ほどとんとんと出して並べてみせた。

「今日出せるのはこれね」

「この銘柄、初めて見ます」

「こっちの二本は同じ蔵元くらもとのところ。この間、蔵元の営業さんが置いてくれたから試しに出したけど、なかなか良いですよ。ちょっととろみのある感じだね、あ、こっちは純米酒」

店主の解説を聞きながら、どれにしようか決めかねて悩む。日本酒にこだわりを持たないタイプなので、淡麗辛口たんれいからくちからまったり系までどれも美味しく飲めてしまうんだ。

「決められないなあ」

「それなら、三種類の飲み比べセットにします？」

「うん。そうします」

悩みつつも三種類選んで、升ますに入った小グラスにそれぞれ注いでもらう。グラスを正面に掲げていただきますって小さくつぶやいて、まずは最初のお酒。辛口のやつ。んー、すっきりしていて美味い！

何口か堪能したら、二杯目に口をつける。こっちはにがり酒。少し発泡していて酸味があって、残暑厳しいこの時期にぴったりだった。ああ、幸せ。

私の幸せはワンコインで買える。

満ち足りた気持ちでしみじみと酒が飲める幸せについて噛みしめっていると、お店の自動ドアが開いてチャイムが鳴った。お客さんだ。単純にお酒を買いに来た人なのか、角

打ち客か。小さなカウンターなので、角打ち客なら場所を詰めないといけないと思い、そちらに意識を向けた。

「すみません、表の看板の角打ちって見かけて……」

ジャケットとネクタイは外したビジネスカジュアルな格好のサラリーマンだった。いかにも仕事ができそうな、多分私と同じくらいの年齢の男の人。会社帰りにあの看板を見つけてふらりと立ち寄ったのだろう。隣に来てても良いように、バッグを持ってズリズリと左に移動する。

「ありがとうございます」

「いいえ」

お互いに目を合わせずに挨拶し、私は三杯目のグラスに口を付ける。まったりとろりとした甘めの味。うんうん、これは最後に取っておこう。

にがり酒に戻って、味を堪能する。そうだ写真を撮っておかなくちゃ。自分が何を飲んだか記録しておかないと、すぐ忘れてしまう。といってもメモとかは取らないから、結局お酒の特徴も名前も覚えなくて終わってしまうんだけどね。

「瓶、動かしてもいいですか？」

「どうぞ」

私が撮り終わったのを確認して、店主が隣客の前に日本酒を並べ直す。

「今日出せるのはこの六種類で」

悩むなら三種類の飲み比べセットがいいと思いますよー。と、私も心の中でお隣さんに声を掛ける。そしてまた、にぎり酒を一口すすった。

隣の人はやはり飲み比べセットを頼んだ。初めてみたいだし、それが正解。

店主は酒を注ぎ終えると、気が付いたように私に声を掛ける。

「荷物入れあるから、今出しますよ」

言われて手元を見て、初めて自分がバッグを抱えたままでいたことに気が付いた。どれだけ夢中で酒飲んでるのよ。と恥ずかしくなり、店主から受け取った籠かごに慌ててバッグを突っ込んだ。その雑な動作で片方の持ち手だけを掴んでしまい、バッグの口が大きく開いて、中の小物が外へとこぼれていく。

「あ」

私の顔写真と名前が入った会社の入館カードが勢いよく滑っていき、隣の客の靴に阻はまれ止まった。

「落ちましたよ」

「す、すみません！」

なんていうことを。

彼は焦る私を笑顔で制し、かがんでカードを拾ってくれる。が、私にカードを渡す直

前で動きを止め、小首をかしげた。

「遠藤彩乃さん……?」

「はい?」

フルネームを読み上げられ、とっさに身構える。

「あの、東第二中学校の?」

「え?」

自分の卒業した中学校の名前が上がつて、思わず顔を上げた。

「懐かしいなあ。まさかこんなところで出会えるとは。俺、大浦瑛士おおうらいしです。覚えてる?」

そう言って懐かしそうに目を細めて微笑む男性を見つめ、私はぼかんと口を開けてしまった。

「え、えー?」

大浦君? これがあの大浦君? 元クラスメイトで、中学二年生のときに転校しちゃった男の子の?」

「大浦君は、覚えてるけど」

忘れる訳がない。私には彼を忘れられないある理由があった。でも、

「ずいぶん、変わっちゃった。なあ……」

なんと言っているかわからず、曖昧につぶやいた。

私を知っている中学二年生当時の大浦瑛士君は、背が高くて眼鏡をかけている、地味目で大人しい物静かな男の子だった。

穏やかだけれど求められれば自分の意見をきちんと言う大人びた性格で、いざとなればみんなが彼を頼りにしていたような気がする。クラスの中で目立ってはいなかったけれど、彼がお父さんの仕事の都合で転校するって聞いたとき、それを本気で寂しがるクラスメイトたちが多かったのにはちょっとびっくりした。

そんな彼と奇跡的な再会を果たした訳だけど、今、目の前にいる彼は世慣れたイケメン言われてみればかつての大浦君の面影は残しているとは思うけど、このござっぱりとしたイケメンが、あの物静かな大浦君なのか。

コンタクトレンズに変えたのか、当時印象的だった眼鏡もかけてなくて、爽やかな笑顔を浮かべる大浦君は、なんかいかにもバリバリに仕事できますオーラを出している。

「……本当に、大浦君？」

こんな奇跡の出会いとか、本当にあるの？ 特殊詐欺とか陰謀とか、犯罪的な何かに巻き込まれそうになつてるとかじゃなくて？

おずおずと言葉を返す私に、目の前の彼は苦笑した。

「俺のこと、忘れちゃった？ 転校した後、しばらく文通してくれてたのに」

「うわあー！」

ヤバイ、本物だ！

一気にお酒が回ったようにくらくらした。そうなんですよ、私が地味な大浦君を覚えているのは、彼が転校した後、なぜか文通をしばらく続けていたからなんです。

文通！ 一体いつの時代なんだって話だけど、文通してたんだよ私たち。

「大浦君、こっちに帰って来てたんだ」

「まあね。大学の頃に」

「そっか」

「遠藤さんは？ ……そうだ、もしよかったらこの後、どこかで飲み直さない？ 久しぶりの再会だから、ゆっくり近況を聞きたいし」

屈託なくニコニコと笑って酒を飲む大浦君を見つめ、心が揺らぐ。金曜日の会社帰りに角打ちで一人飲んでいるような女に、用事なんてある訳がない。

「お客さんたち、この後どこか行く？」

なぜか店主が反応して、会話にずっと入ってきた。

「うちが酒を卸しているお店、せっかくだから行ってみてよ。ほら」

指さされたカウンターの端に引き出しのような木の箱があって、ざっと見て二十くらいに仕切り板で区切られていた。そこに表が見やすいように斜めに立てかけて、様々な飲食店のシヨップカードが入っている。これ、全部取引先なのか。これだけじゃない

んだろうけど、さすが酒屋だ。

そしてそこから選んだカードを広げ、それぞれの店の特長を熱く語る店主と、それに応える大浦君。二人の笑顔に見つめられ、私はなぜか彼と一緒にご飯を食べることになったのだった。



結局、酒屋の店主セレクトのお店の中からイタリアン・バルを選び、私と大浦君はそこに向かった。適度な広さと席同士に空間があり、ここなら周りの会話も気にならないということとで店主がイチ押ししていたお店だ。

「いや本当に久し振りだね」

まずはスパークリングワインで乾杯するけど、ツマミもなしで飲み比べ三杯セットをやってきた私たちだ。下地はできていたのでまずはご飯を優先する。

大浦君はとても美味しそうにご飯を食べる人だった。ナイフとフォークを扱う所作が綺麗で、食べ物を口に入れた瞬間に口元が嬉しそうにふつと上がる。ご飯を食べているところをいつまでも見ていたい気にさせる人だ。

「俺の顔、なんかついてる？」

「えっ？ いやごめんね。美味しそうに食べるなあって思って」

「久し振りだからね。こうして人と一緒に楽しくご飯食べるの」

「大浦君、独身？ 今は一人暮らしなの？」

「うん。近くのマンションに住んでるよ」

ごく気楽に指差す方向に、ひえって思った。

こちら辺はいわゆる都会のど真ん中でオフィス街だけど、再開発も盛んに行われている。特に大浦君が指差した方向は高級タワーマンションがぽこぽこと建ちはじめて、お金持ちが住むエリアになっていた。

「転校してからの大浦君を教えてもらおうか」

まるで刑事ドラマの取り調べのようなノリで聞いてしまった。文通をやっていたといつても、せいぜい数ヶ月。文通を始めたきっかけも、確か転校したクラスメイトに暑中見舞いを出そうって思い付きの延長で、それがなんとなく続いた程度。そしてそれが終わった経緯もちょっとあれだった。

「大学受かったから一人でこっちに戻ってきたんだ。数年間は留学で日本にいなかったりしたけど帰国して、就職して転職して、勤務地はここから二駅くらい離れたところになったから、家を同じ沿線にしたいなと思ってこの街に住みはじめたら、遠藤さんと再会した」

そうしてニコツと笑われた。

ちよつと待つて、情報量が多すぎる。留学してたつて？　そして現在の勤務地は駅二つ先つて、それは都会のさらに中心地。勤務先のイメージが大企業か外資系しかないんだけど……。で、住んでいるところは独身なのにタワマンつて、どんだけ人生の成功者なんだ？

「遠藤さんは？」

邪気のない目で促される。

「えー。私も転職しつつ、今の会社で落ち着いてるよ」

大学出てからブラック企業に就職して、体壊して仕事辞めて、その後しばらく派遣社員やつてたけど、一昨年なんとか正社員になれて今に至る、つてとこかな。

と心の中で大浦君っぽく付け足すけれど、それを言ったところで空気が荒^{すさ}むだけなので、口にはしない。大人の礼儀だ。

「失礼だけど、結婚」

「していません」

「あ、はい」

一瞬だけ、空気を荒ませてしまった。いけない、いけない。

派遣社員時代にその会社の営業職と付き合ひ、派遣契約の最長期間が切れて退職し

たら、なぜかその彼氏まで縁が切れてしまった。それが二十九歳のとき。

この年で女一人放り出すなんてあいつは鬼だと思つたけど、それと同時に恋愛なんて不確かなものに流された自分を心の底から呪つた。

そこから新しい派遣先を見つけ、会社の正規雇用の試験に受かり、なんとか安定した生活ができるようになったのがこ二年ほどのこと。今の私は老後のために、マンションを買つて実家を出ることを最大の目標にする、貯蓄を趣味とした慎^{つつし}ましいおひとりさまだ。

目の前のイケメンとの徹底的な人生の差を見せつけられたような気持ちになつてしまふけど、ここで卑屈になつてはいけない。

気分を変えるように、甘鯛のカルパッチョに手をつけた。ぷりぷりとしていて美味しい。さすが酒屋の店主がお勧めするだけあつて、ワインも美味しいけど料理も確かな店だわ。

「美味しそうに食べるよね」

そう言われて、え？　と顔を上げた。やけに楽しそうな表情の大浦君が、こちらをじつと見つめている。

「さっきも遠藤さんだつて分かる前から、美味しそうに酒飲む人だなと思つてこつそり見てたんだ。けど、食事も美味しそうに食べる」

「それは大浦君もだよ。幸せそうにご飯食べるよね」

「お互いにね」

そう言つてまた微笑まれ、なんだかささくれだった心が和んでいった。この温和な雰囲気は、確かに昔の大浦君と同じだなあ。そう思うと余計にくつろいだ気分になる。

そして話題は当時のクラスメイトについての情報交換となり、結果、二人だけとはいえない楽しい同窓会となった。中二で転校つていたら、もうすっかり友達との縁は切れているのかと思いきや、意外と男子同士で交流は続いていたんだって。大浦君の人柄なのかな。

とまあ、そんなこんなでワインも一本空き、料理もメインの肉料理とパスタを食べ終えた。そろそろお開きの頃合いだなと思い、私はバッグに手をかける。

「大浦君、お会計しようか」

「もう払ったよ」

あっさり言われて動きが止まる。いつの間に。あ、さっき私がトイレに行ったその隙にか。

「いくらだった？」

「いいよ。今日は久し振りに会えた記念に、俺に奢らせて」

「駄目」

間髪容れずに言い切った。

「恋人でもないのに奢られる理由はないよ。久し振りに会った友達に借りを作るのとは違うと思うし。だから、割り勘にしよう」

ちよつと言いきつかったかな、と思いがちながらも止められなかった。それには一応理由があるんだけど、この状態でその話はしたくない。

大浦君は私の勢いに押されたようで、びっくりした顔でしばらく固まつてから、ぷはつと息を吐き出し笑い出した。笑い上戸なのか、この人は？

「なんか、凄く新鮮だ。この年で独身だと、女性とご飯に行ったら必ず奢るものだって染み付いてて」

「え……、それちよつと極端じゃない？」

ご飯奢ってくれるイケメンってめっちゃ利用価値高いなとは思うけど、それって無償なの？ その見返りとして主に体方面のあれやこれやがあるのだとしたら、超面倒。そう思う程度に、私の恋愛ホルモンは枯れている。

「それに私、ナンパされた覚えはないし」

「そうだよ。ね。ごめん、俺が間違えてた」

そうして大浦君は金額を伝えてきた。きつちり半分って訳ではなさそうだけど、まあ妥当な金額。そしてそのまま、提案される。

「遠藤さんとご飯食べるの、楽しかった。また一緒に行きたいんだけど、会ってくれる

かな？」

「……角打ちなら、いいけど」

迷いながら、そう答えた。

確かに大浦君との二人同窓会は楽しかった。でもこのままなし崩しに飲み会が恒例になるのは避けたい。私には確かめたいことがあるんだ。

「遠藤さんが次にあの酒屋に行くのは、いつ？」

大浦君が、私の身構える空気を敏感に感じ取って遠回しに聞いてくる。必要以上に踏み込んでこない配慮がありがたい。

「二週間後かな」

「分かった。二週間後の金曜十八時くらいに、酒屋にいるから。もし来られたら、来て？」
強要しない優しい誘い方。上手いなあ、って素直に思った。この人、女の子の扱いにめっちゃくちや慣れている。

中学生の頃は見つけられなかった大浦君の優しさに、私たちもお互いに大人になったんだなって感慨深く思ってしまった。しかし、私が大人になった部分って果たしてあるんだろうか？

「帰ろうか」

「あ、うん。今日はありがとね」

お酒の入った頭で取り留めもないことを考えても、埒^{らち}はあかない。今日の楽しかった気持ち素直に言葉に込めて大浦君に伝えようと、なぜかふいつと視線がそらされた。

「俺の方こそ、付き合ってくれてありがとう。……今日、会えて嬉しかった」

そして真っ直ぐ見つめられる。なんだろう。声が真剣。そして目元がほんのりと赤い。って、ああそうか。

「お互い、いい感じで酔ったね」

「……あ、うん。そうだね」

一瞬、不意をつかれた様な顔をする。大浦君は小さく息をつき、さっきまでの口調に戻って立ち上がった。

「駅まで送るよ」

「でもマンション、逆方向」

「お願いだからそのくらいさせて」

「はい」

軽いノリで返事して、駅まで送ってもらう。本当に今日は楽しく夜を過ごすことができた。でもその余韻に浸る前に、私には確認しなくてはいけないことがある。

家に帰ると私は自分の部屋に駆け込んで、本棚にあるファイルを取り出した。

クリアポケットに一通一通丁寧に入っている、いくつもの手紙。差出人は、大浦君。

十七年前の交流の証だ。

最初は、暑中見舞いの葉書^{はがき}だった。

大浦君は中学二年生の一学期の終わりに転校していった。ちょうど女友達同士で暑中見舞いを送り合っていた時期で、多分その葉書が余っていたからとかの軽いノリで、大浦君にも暑中見舞いを出したんだ。そしたら、返信として残暑見舞いの葉書が届いた。

ここで終わればそのままだけど、この頃ちょうど私はレターセットにハマっていた。

買って集めても、なかなか使うあてのないレターセット。大浦君からの残暑見舞いの返信にさらに手紙で返信をしたのは、単純にそれらを消費したかったからだ。それにも大浦君は丁寧^{ていねい}に返信をしてくれた。

こうして、いつの間にか文通が始まり、私たちはお互いの学校生活を報告し合うようになった。でもそれも数回繰り返せば、ネタが尽きると言う訳で……

「あった。これだ」

私は、やり取り三通目の大浦君からの手紙を広げ、うめくようにつぶやいた。便箋一枚の近況報告の最後に書かれた文字は、

『誕生日おめでとう。』

だった――



――どうしよう。書くことがない。

中学二年生のあのとき、大浦君がいなくなった後のクラスの様子を手紙に書き綴り、読み直した私は困り果てていた。

男子と女子では交流範囲が違う。自分の仲の良い子の話を書いたところで、大浦君にとって面白い話だとは思えない。そう考えると、近況報告は酷くあつさりとしたものになって、便箋一枚を埋めるのがやっとだ。これでは、読書感想文を書くよりタチが悪い。他にになにか書くことないか、えーっと、ああそういえば――

『そういえば、来月は私の誕生日なんだ。十二月十七日ですっごい中途半端。いつものこと一週間後のクリスマススイブが誕生日、の方がインパクトあってよかったのになあ。』よしこれで三行書けた。日付も入れて名前も書けば、便箋二枚目の半分くらいにはなる。これで良いだろう。

そんな気持ちで送った手紙の返信が届いたのは翌月、十二月になってからだった。が、最初は返信だと思わなかった。なぜならそれは簡易書留で送られて来たから。

「彩乃、なにか応募でもしたの？」

そう聞かれながら親から封筒を受け取り、差出人を見たら大浦君だった。混乱のまま

封を開けると、そこに入っていたのは手紙と千円分の商品券一枚。
『こちらは田舎で、遠藤さんに気に入ってもらえるようなプレゼントが見つからなかったの、せめてもの気持ちで商品券を贈ります。使ってください。』

誕生日おめでとう。』

読みながら、冷や汗がだらだらと流れていく気分を味わった。

「ヤバイ。私、やっちゃったよ……」

心優しい同級生に無自覚とはいえ圧をかけ、結果として商品券をゲットしてしまった。こんな、こんな困る……！

自分のやらかったことに慄いて、それからの文通の記憶はふつつりと途絶えている。もうだけでもらって、返事もしていなかったなら最低だ。十七年後、奇跡の再会に一瞬びくついたのも、頑なに割り勘を主張したのもこのせいだ。

ファイルをめくる。次の返信が届いていたことにほっとする。記憶の消去と共に、このファイルも開かれることなく本棚に突っ込まれていた。

忘れない、けどないことにはできなくて保管したままだった、大浦君からの手紙。

結局、簡易書留の後は二通手紙が届いていて、多分三年生に上がったところで自然消滅していた。ちなみに肝心の商品券は、とくに使用してなくなっていた。なんか、手紙と一緒にそこにあるっていうのが重かったんだよね。

「ともかく」

気分を変えようと、声にしてみる。

「再会したんだもん、こちら辺の汚名を返上しなくては！」

そして私は二週間後を見据えて、会ったら謝る、をイメージトレーニングすることになった。



再会から二週間後の金曜日。

仕事を終えて十八時ちょい前に店に着くと、大浦君はすでに酒を片手に店主とのんびり話をしていた。

「お待たせーって、大浦君早かったね」

「家から来たからね。今、リモートワークが基本で、出社は週一なんだ」

「おお、そっか」

事務職なのに旧態依然で毎日出社させられている私とは、えらい違いだ。と、そんなことより――

「大浦君、ごめんなさい」

「え、なに」

「本当は前回会ったときにまず謝らないといけなかったんだけど、結局勇気が出なくて言えなかった」

「ちょ、怖い。だからなにを」

「十七年前、誕生日アピールして商品券贈ってもらっちゃったの、反省してます。ごめんなさい！」

「それ、今更蒸し返すっ？」

勢いよく頭を下げて、そして顔を上げたら、酒を片手に持ったままうろたえている大浦君がいた。

「とりあえず、店変えようか」

「え、私まだ注文してない」

「うん。だから店変えよう」

「お客さんたち、別のところ行く？ それなら焼鳥屋はどう？ 店長さんが日本酒好きで、結構いい酒置いてある店だけど」

酒屋の店主まで会話に入ってきて、結局私は店主お勧めの焼鳥屋に連れて行かれることになった。

「さてと」

赤ちようちに暖簾^{のれん}という伝統的様式美にあふれた店に入り、出されたおしぼりで手を拭う。焼き鳥といえはビールでしょう。と、こちらも様式にのっとり生ビールを頼んで、突き出しの小鉢と枝豆が届いたところで乾杯した。

話を始める前に環境を整える、余裕ある大人の行動で好感がもてる。

と思いきや、整った途端に大浦君がもの凄い勢いで頭を下げた。

「あの、誕生日プレゼントの件ですが、すみませんでした！ あんなもん贈って、本当に今思い返しても恥ずかしくなる。というか、あれ、覚えてたんだ？ てっきり前回、話を振ってこないからもうないものとされてるのかと思っていたのに」

これは典型的な余裕のない大人の姿だ。

でもこれはこれで好感がもてるのはなぜなんだ？ イケメンだからか？ いや、大浦君だからか。

「大浦君も、覚えてたんだね」

そう言ったらなぜか大浦君は姿勢を正し、真剣な表情で私を真っ直ぐに見据えた。

「聞いてください」

「あ、はい」

「中学二年生のあのとき、遠藤さんが来月誕生日って知って、悩んだんだ。プレゼント贈った方がいいよな、いや、贈りたいなって思って、でもなにを贈ったらいいか全然分

からなくて。俺、それまで割と人に興味がないというか、自分から人になにかするってタイプじゃなかったし、ましてや女の子に誕生日プレゼントだなんて、買うどころか選んだこともなかったし」

思い返して恥ずかしくなっているのか、大浦君の耳が赤い。

目の前にいるのは世馴れた三十路超えの男のはずなのに、恥ずかしがる表情は中学時代の大浦君そのままだ。

「それで、自分なりに考えて一番身近な女性に意見をもらおうってことで母に聞くことにしたんだ。でも、今思うと聞き方も悪かった。状況を話さずいきなり、プレゼントをもらうとしたらなにがいい？　って聞いて。そしたら商品券って即答された」

「あっちゃー……」

それで、あれだったのか。

十七年に及ぶ謎が解けて、納得した。

そりゃあ、日々の生活に追われたお母さんが欲しいものを聞かれれば、商品券でしょう。花束は食えないし、食べ物は好みがある。趣味の合わない服だのアクセサリーだのをもらって感謝の心を強要された日にはブチ切れた。今の私なら深く納得する。

「それから、一年くらい経ってからかな、話の流れであれが同級生女子への誕生日プレゼントだったってことを母親に知られて、もの凄い勢いで怒られた。でも謝ろうにも、

文通は自然消滅していて連絡するにも今更なタイミングだったし。それで遠藤さんからの手紙を読み直したら、商品券以降の文面がなんか微妙かなって思えてきて」

「あ、いや、あー……」

当時の自分を思い出したのか、大浦君の表情がどんどん曇っていき、視線がテーブルへと落ちていく。私はなんと言っているかわからず、ただビールを飲み干す。するとまるで計ったかのように、注文していた焼き鳥がやって来た。

「焼き鳥塩盛り合わせ、お待たせいたしましたー」

「あ、生おかわり！　大浦君は？」

「うん……」

「お兄さん、生二でお願いー！」

「つしたー！」

空気が、ヤバイ。このままでは大浦君が暗黒界に呑み込まれてしまう。

本気でそう心配したけれど、本人も流石に気付いたのか、最初のビールを飲み干してまた視線を真っ直ぐこちらに向けた。

「今思うと、あれが人生のターニングポイントだったんだよな。あれからもうちょっと、人に関わってみようって思うようになった。同じ後悔をするなら、人任せじゃなくて自分でやって後悔した方がいいと思って」

「そっか……」

回想を終えた大浦君は、落ち着いた表情で私を見ている。無事現在のイケメン状態に戻ってくれていた。よかった。

でもまあね、そちらの事情は分かったけど、中学二年生の女子にとって商品券は重かったんだよ、大浦君。

私はビールをぐびりと飲むと、同じように真っ直ぐに彼を見つめ返した。

「では私の番です。聞いてください」

「あ、はい」

「最初に弁解だけど、誕生日について特になにか期待してた訳じゃなかったんだ。まあ次の返信でおめでとうって書いてくれたら嬉しいな程度には期待していたけど。そこにガチの商品券が届いた私は、心の底から反省しました。人に無闇になにかを強請^{ねだ}ってはいけないし、そう思わせるような言動もしてはいけない。なので私にとっても、あのプレゼントは人生のターニングポイントだったと思う」

「本当に、ごめん……」

また表情を曇らせる彼に、慌てて私は手を振って否定した。いけない、いけない。決して責めたい訳じゃないんだ。

「謝るのは私の方だよ。変な圧をかけてしまって、ごめんなさい。それでね、せっかく

こうして再会できたんだし、あの商品券分、なにか大浦君にお返しさせてもらえないかなって思っていて。えっと、自分の中の罪悪感を払拭させたいというのか……」

とっても乱暴に言ってしまうと、商品券分の借りを返してチャラにしたいってことなんだけど、もらったこと自体をなしにするのは違うよね。

プレゼントをもらったのは単純に嬉しい。その気持ちは残したままで罪悪感を取り除いて、心のしこりを溶かしたい、みたいな。

「あくまでも私の我が侬^{みまご}なんだけど」

「それ、俺がリクエストしてもいい？」

無意識のうちに自分の視線がテーブルに落ちていたのに気が付いて、慌てて目を上げる。

「映画代、奢ってくれる？ 観たい映画があるんだ、アクション物の。来週末で終わっちゃうから一人で行こうかと思っていたんだけど、もし遠藤さんさえよければ来週土曜日、一緒に行きませんか？」

「映画……」

「千円じゃ足りないから、もちろん不足分は自分で払うよ」

「いや、奢らせて。不足分は利息ってことで」

勢いよくそう言ったら、なぜか大浦君に笑われた。

「よかった。女性をアクション物に誘うのってどうかなって心配だった」

「デートならともかく、友達と遊びに行くのにそんな気を遣わ^{つか}ないでいいよ」

そもそもその映画の目的は、商品券の存在意義を軽くすることにあるんだ。好きな子を誘^つってのデートとは違うしね。

「友達か……」

それにしても大浦君は飲み代を奢^もろうとしたり映画の選択を配慮したり、マメな人だな。

そんなことをぼんやりと思っていたら、なぜかずっと身を乗り出して顔を近づけられた。

「あとお願いがあるんだけど」

「うん？」

「遠藤さんのこと、彩乃って呼んでもいい？ せっかく十七年振りに友達と再会して、交流が復活したんだ。名字呼びじゃなく、もうちょっと親しくなりたいんだけど」

「へ？ うん、いいけど」

聞かれて素直にうなずく。私の呼び名は昔からアヤで、女子だけでなく部活で一緒だった男子とかにもそう呼ばれていた。そう考えると彩乃ってきちんと呼んでくれるのは、友達の中でも丁寧な方だ。

「よかった。じゃあ俺のことも瑛士^{えいし}って呼んで、彩乃？」

「え？ ……瑛士」

言われるままにそう呼び返すと、大浦君、じゃなかった瑛士はにつこりと私に微笑みかけた。

なんだこの笑顔は。蕩^{とろ}けるような笑顔とはこのことか。

「ううつ。破壊力抜群の笑顔もらっちゃった」

眩^{まよ}し！

と叫んで手で視線をさえぎって、顔を背ける。なんだか、茶化さないとやっていけない気がした。

「なんだよ、それ」

そんな私の態度に、わざとむっとしたような表情で瑛士が抗議する。

「そういう風に笑ってかわすってことは、彩乃は破壊されていないってことだろ？」

「そうとも言うね」

でも今の笑顔と声は、かなりドキドキした。これで今まで女の子口説いていたなら、かなりの成功率なのではないかと思うくらいに。

「仕方ない。それは今後の課題とします」

そうまとめると、瑛士は気分を切り替えるようにビールを飲み、私を見つめた。

あれ？ 今後とは。

「あと、さっきの話を蒸し返すようだけど、彩乃は俺に強請^{せうぎん}つていいし、そう思わせるような言動をしてもいいよ」

瑛士の口調にはっとして、直前までの些^さ細な疑問が飛んでしまう。

穏やかな、声。それゆえに彼の本気度が伝わる、静かな口調。

「さすがにそこまでは……」

なぜかいたたまれない気持ちになってそわそわする。思わず視線をうろつかせると、

瑛士がくすりと笑いながら焼き鳥に手を伸ばした。

「焼き鳥食べよう。冷めちゃうよ。あと、俺たちビールを飲んじゃってるけど、ここは日本酒のラインナップが良いって話だったよな」

「そうだった！ メニュー見せて」

そこからは楽しい飲み会へと突入して、焼き鳥は年齢を重ねるにつれタレ派から塩派になるよね、とか、人と分け合う必要がないなら断然串から外さず食べる派、なんていう焼き鳥あるある話で盛り上がった。

ずっとしこりとして残っていた誕プレ問題の解決策が見つかってよかった。そういえば映画を観に行くのって久し振りだな。お詫びだけでなく楽しめそうだ。

第二章

翌週九月の第四土曜日は、秋晴れの爽やかな天気になった。

待ち合わせ場所は映画館の最寄り駅で、昼過ぎに着くとすでに瑛士が待っていた。VネックのTシャツにスリムパンツ、そして秋らしくジャケットを羽織るといふ至ってラフな格好なのに、お洒落感が漂う。

そして今日の瑛士は眼鏡をかけていた。相変わらずイケメンだけど昔の大浦君の面影もあって、ちょっと懐かしいのと安心感が湧きあがった。会社帰りに飲みに行くだけならいいんだけど、やっぱりお日様の下でイケメンと会うとなると、私だってそれなりに身構えるものはある。

「お待たせ。今日は眼鏡なんだね」

「コンタクトと違って、眼鏡はかけ替えるだけで、度数も替えられるからね」

「替えるの？」

「仕事でパソコンとか近距離のものしか見ないときと、映画とかコンサートとか遠くのものをはっきり見たいときとで、度数を替えるんだ。コンタクトだとつけっぱなしが基本だけど」

そういうもののなか。

ほう、とうなずいていると、瑛士が目を細めて私を見つめた。

「彩乃は今日、ワンピースなんだね。可愛いし、よく似合ってる」

「あ、ありがとう」

会ってすぐに女性を褒めるって、ここはイタリアなの？ かつての面影もある瑛士だけど、やっぱり人とのコミュニケーション能力が、昔に比べて各段にアップしている。

——人に関わってみようって思うようになった。同じ後悔をするなら、人任せじゃなくて自分でやって後悔した方がいいと思って。

先週の懺悔大会で言っていた、瑛士の言葉を思い出す。

やらかしちゃった後に前向きに考えられるのって偉い。そしてその結果が現在のイケメンかと思うと尊敬してしまう。一方の私なんてあの苦い経験を経て思ったことはひとつだけ。

——人に無闇になにかを強請ってはいけないし、そう思わせるような言動もしてはいけない。

だもんなあ。うーん、性格。

「じゃあ行こうか」

「うん」

気持ち切り替えるようにうなずくと、私たちは歩き出した。

映画館に着くと、いったん二手に分かれた。私は予約していたチケットの発券を、瑛士は飲み物を買ってくるそうだ。発券してグッズショップの前で待っていると、しばらくしてドリンクとポップコーンを抱えた彼が現れた。

「ポップコーン！」

しかもキャラメル味！

わあっと子供みたいに目を輝かせたら、嘖き出されてしまった。

「そこまで喜んでもらえたなら、買った甲斐があったよ」

「だって滅多に食べないじゃない？ 映画館来たーって感じがするよね」
すっかりテンションが上がってしまったが、今度はこちらの番だ。

場内アナウンスが流れ、お目当ての映画が上演されるシアターが開場したので、私が誘導するように先に歩く。通常のシアターを通過し、私は大きく施設名が表示された一角に向かった。

「え？ これって」

戸惑う瑛士を安心させるように、私がうなずく。

「うん、体感型シアター。椅子が動いたり、風が吹いたりするの。今まで話聞くだけで体験したことがなかったから、ちょっと興味あって」

追加料金でもう一回分映画を観られそうって、正直思った。でもまあそれは十七年分の利息だ。

そう考えてつい奮発したんだけど、これって自己満足だったかな。

「余計だったかな？」

不安になって聞いたら、不思議そうな顔で聞き返されてしまった。

「なんで？ 俺もこれで観たことなかったから、凄く嬉しい」

素直に喜んでくれる人でよかった。ほっとしながらシアターに入る。

そして二時間後――

「映画、面白かったね」

「最高だった。やっぱりあの監督、こういうのをテーマにすると上手いよな」

「確かに！」

「あと、体感型は臨場感りんばうかんがあつてよかった。これ選んでくれて、ありがとう」

心から楽しんだ表情で瑛士が言ってくれたのが嬉しくて、でもなんだか照れくさくて、へらっとした笑顔だけ向けてしまった。

そのまま気をそらすように、今観た映画を振り返る。アクション物はやっぱり観ていてスツキリするなあ。

満足のため息をついて、私は残っていたコーヒーを飲み干した。

「ゴミ捨ててこようか？」

ついでに瑛士のコーヒーカップも捨てようかと思って聞いてみる。

「一緒に捨てに行くからいいよ」

やんわりと断られ、一緒に廊下の端にあるゴミ箱に向かつて歩き出す。一瞬の間があつて、くすつと瑛士が笑いだした。

「体感型でポップコーンは、さすがにちょっと忙せわしなかったかも」

ん？ と横に並ぶ彼を見ると、ポップコーンの容器を振ってみせた。中に残った屑くずがカラカラと音を立て、映画を観ている最中の私たちを思い出させる。

二人でMサイズなら余裕だと思ってなめていたけど、いつまでも減らなくて最後は意地のように食べていた。

「映画観ながら振動にも揺られ、風も受け、色々とやることがあったからね」

「振動があると、ポップコーンの存在忘れるよな」

くすくすと笑い続け、コーヒーカップと一緒に空の容器をゴミ箱に捨てる。

「次回注文するなら、ポップコーンはSサイズで十分だね」

反省を込めて言うのと、瑛士がそれに付け足した。

「体感型はこれで満足したから、次は音響特化型を試したいな」

「確かに。私も次は、音響の方がいいな」

うんうんってうなずきながら映画館を出る。さて、これで今日のミッションはクリアしたけど、このまま解散するのかな。

チラッと隣の瑛士を見上げたら、しつかり目が合ってしまった。

「……次も、誘っていいの？」

「へ？」

なにそのワンコがご飯ねだるみたいな表情。

「映画？ 別にいいよ。良さそうなのがあつたら誘ってよ」

「うん。誘う」

間髪容れずにそう言うから、笑ってしまった。

「そんなに映画好きだつて知らなかった。お勧めとかあつたら教えて」

「それなら、俺の家に来ればいいよ。今度一緒に観よう」

タワマンかあ。めっちゃお洒落なインテリアとかで統一されてそうだ。汚さないかちょっと心配。

「いつかお邪魔させてください」

さつくりと答えると、私はぐると辺りを見渡した。

それよりも、だ。私たちなんとなく駅とは反対方向の繁華街を歩いているけど、どこに向かっているのでしょうかね？

「瑛士はこの後予定ある？ せっかくだからお茶でもしていく？」

「えっと、せっかくだからご飯まで付き合ってください」

「ああ、一人暮らしだもんね。いいよ、別に。でも今、四時前でしょ？ ちよつと時間が中途半端だ」

「それなら買い物行こう。俺、買いたいものがあつて」

「オッケー」

そんな感じで買い物に付き合つて、夕方からは瑛士お勧めのビストロに行った。

最近は美味しいものを食べる機会が増えている。もちろんそのきっかけは、この目の前の人なんだけどね。

乾杯をして気持ちをあらため、私は瑛士を真っ直ぐに見据えてペコリと頭を下げた。

「今日は、私の我が侶に付き合ってもらつてありがとうとございました」

頭を上げると、穏やかな表情で彼が私を見ている。

「これで彩乃が抱いていた、誕生日プレゼントの罪悪感払拭された？」

「された、された。特に瑛士が楽しんでくれたから、余計によかったなつて思いました」感謝を込めてそう言う、瑛士もワイングラスを置いて、私に向き合った。

「それじゃあ、今度は俺の罪悪感も払拭させて？ 自分のやらかしで、彩乃にずっとそんな気持ちを抱かせてた。これからは貸し借りなしで、こうして付き合つてほしいんだ」

その真剣な表情に、つい自分の姿を重ねてしまった。私が商品券に対して罪悪感を抱いてしまったのと同じくらい、この人も商品券を贈ったことに負い目を感じていたんだろうな。

「分かった。じゃあ、中学二年生の誕プレ問題は、ここでお終い。次回からはリススタートね」今日一緒にいてつくづく思ったけど、瑛士は本当に出来た人だ。そんな彼とこうして改めて遊び仲間になれたのは、自分にとっても幸運だよな。

「では、これからもよろしくってことで、乾杯ー」

「うん、乾杯」

もう一回乾杯をすると、瑛士が笑ってグラスを重ねてくれた。その表情がちよつと苦笑っぽい。

「どうしたの？」

なんとなく引つかかって聞いてみる。でも瑛士はさらに笑ってみせるだけだ。

「いや、いいよ。いつか、おいおいね」

「はあ」

「それより彩乃、角打ちに行く頻度って、二週に一回くらいって言ってたっけ？」

「うん」

「来週は、角打ちで会える？」

「う、ん。そうだね」

そこからなんとなく話題はそれで、色んな話で盛り上がった。

このひと月ほどで三回目の瑛士との食事だけど、飽きることなくまた会いたくなってしまう。知識が豊富な人なので、話題が途切れることがない。

三十代になって、こうやって気楽に遊びに行ける友達ができたのはラッキーだったな。ふわふわとした心で自分の幸運を噛みしめる。

この年代って結構微妙で、家庭があると日々の生活に忙しくて遊ぶ暇がないし、独身なら仕事か婚活に忙しい。私は早々に婚活戦線から離脱してしまったけど、仕事に対して向上心があるタイプでもない。世間から取り残された状態で、淡々と日々を過ごしていたんだ。そんな毎日に、瑛士が彩りを添えてくれた。感謝だわ。

そしてそれから、私の生活に隔週金曜日の飲み会が追加されるようになった。



五回目の瑛士との飲み会は、おでん屋さんで決まった。

私たちが角打ちで再会したとき、酒屋の店主がお勧めしてくれていた、あのおでん屋さん。

出汁がよく染みたおでんと、日本酒との組み合わせ。はふはふとはんぺんを無心で齧ると、口の中にまだ味が残っているうちに冷酒を一口する。

「んんー、美味しいね！」

幸せにふやけきった顔で、目の前の相手に同意を求める。

角打ち飲み会が四回と、映画帰りに立ち寄ったビストロを合わせると計五回。毎回美味しいものを食べて飲んでいるので、もうすっかり素の自分が出てしまっていた。

だって仕方ないよね。美味しいものを前にして猫をかぶるような真似はできないもの。酒を嗜み、大人であることの飲^{よろこ}びを素直に出せる飲み友達がいるのって、本当に最高だ。

「俺、彩乃の食べてるところを見るだけで、酒が進む」

「いや、おでんも食べてよ。大根も見えてほら、この染みつぷり」

そうしてまた冷酒をぐびりと一口。十月の第三週、秋といいつつまだまだ残暑が続いている。おでんのような温かい食べ物にきりつと冷えた日本酒の組み合わせが、最高にハマる季節だ。これ、冬になってもっと寒くなれば燗酒もいい。

「寒くなってからまた来たいな、ここ」

「いいよ。来よう」

「やったー」

冬のおでん会もこれで開催が決まった。上機嫌の私を眺めながら、瑛士が冷酒を飲ん

でいる。その表情が楽しそうだ。こういう、お互いに楽しい気持ちでいるのが心地いい。

「そういうば、また映画を観に行かないか？」

思い出したようにそう言うと、瑛士がスマホで特設サイトを開き、画面を私に見せた。

「ミュージカルの映画化だって。最近、宣伝がよく流れてくる」

「ミュージカル？」

瑛士とミュージカルが結びつかなくて、聞き返す。それからすぐに、理解した。

「そっか。体感型の次は音響特化型で映画を観たいって、言ってたもんね」

どれどれと身を乗り出して画面を見る。有名な賞をとったミュージカルのようで、待望の映画化を果たした話題作だった。その手のジャンルに疎い私はあらずじを把握していないけど、ヒロインが歌っている場面はよくCMで目にしていた。ワンフレーズだけなら私も歌えるくらいだ。

「来週、もし予定が入ってなければ、どう？」

誘う瑛士の雰囲気はこちらの様子を窺っているようで、ついくすつと笑ってしまった。一ヶ月前の再会直後、瑛士からのお誘いにことごとく渋い対応をしたせいか、角打ち以外のお誘いのハードルが上がってしまったっている気がする。

「うん。週末も特に予定入っていないから大丈夫だよ。じゃあ、来週の土曜日ね」

「よかった。ありがとう」

「こちらこそ、誘ってくれてありがとう」

なぜか二人でありがとうを言い合って、来週の予定が決まった。

そして当日――

映画館の中、主題歌が流れるエンドロールを眺めながら、私は眉間^{みけ}に力を込めつつ心の中でつぶやいた。

しまった。しくじった。

まさかの泣ける話だった。主人公の成長物語。宣伝では泣ける要素など一つも匂わせなかったのに、親友との友情だの葛藤だの、まさかと思う場面で感動して涙がこみ上げてきてしまった。これ、油断して泣いたら涙が止まらなくなるやつだ。

ゼロか百かの瀬戸際に立たされた気持ちで、ひたすら眉間に力をこめる。そうしてやり過ぐすうちにエンドロールも終わり、場内が明るくなった。

「……ねえ、彩乃。気のせいかもしれないけど、なんかもの凄^ひい真剣にスクリーンを睨^にみつけてた？」

立ち上がりながら眼鏡姿の瑛士が私に話しかける。

手にはポップコーンの空き箱。前回の反省からSサイズを買ったので、完食済みだ。

「睨^にんでないよ。泣かないように眉間に力込めてただけ」

「……なんでそんな努力を？」

呆^{あは}気にとられたように聞き返し、こちらの顔を覗き込む。そんな瑛士の視線から逃れるように反対の方向に向くと、私も立ち上がり歩き出した。

「映画を観て泣くのは、一人のときだけにしたいから」

「人と一緒にいるときは泣かないんだ。なんで？」

「なんで、って、……気を遣わせたくないから」

自分にとって当たり前の感覚を人に問われると、戸惑ってしまう。逆に瑛士からしたら、私の考えの方が珍しかったらしい。疑問符を頭に浮かべたような表情で、さらに問いを重ねてきた。

「映画で感動して泣くのとてストレス発散にもなるし、感受性が豊かな証拠でもあるから、別に良いんじゃないのかな」

「ちょっとだけならね。でもこの映画、一度涙腺が決壊したらずっと泣き続けてしまいそうだったもん」

「うん？」

「隣で同行者がずっと泣いていたら、気が散っちゃわない？ せっかくの映画鑑賞を自分の涙でぶち壊すようなことはしたくないよ。それに私も、泣くほど物語の世界に入り込むのは一人のときだけにしたいし」

特に相手があなたのような魅力的な男性ですとね、安易に涙なんか見せられないんで

すよ。

と言いたくなって、ついチラリと瑛士を見上げてしまった。

「ん？」

「なんでもない」

速攻で視線に気付かれ、まともや覗き込まれてしまったので、慌てて視線をそらす。くそう、やっぱりいい男だなあ、瑛士。

元同級生、そして今は仲の良い飲み友達として良好な関係が続けられているけど、男女間の友情って難しい。だからこそ、配慮しなくちゃならないことがあると私は思っている。特に意識しているのが、相手に甘えすぎないこと。

媚こびを売らない、と言い換えてもいいかもしれない。

だってこんな人たらしのイケメン、油断したら際限なく頼ってしまいそうになる。瑛士は以前、自分に強請ってほしいと言っていたけど、少しでも気を許したら対等な関係ではなくなってしまう気がする。

私が望んでいるのは、穏やかな友情。親しき中にも礼儀ありだ。

素の自分を出すけど、頼りすぎず、甘えすぎず、適度な距離感でもって接していたい。たとえ感動からくるものだとしても、涙は距離感を乱すから不要だと思っ

「なんかさ、そうやって必死に泣くことを拒否している姿を見ると、逆にこっちのやる

立ち読みサンプル はここまで

気が刺激されるよね」

「やる気？」

不穏ふおんな言葉に驚いて、そらした視線を戻してしまった。

「彩乃の泣いた顔が見てみたい」

ニヤリと笑う瑛士の顔について見惚みとれ、しばらく動きが止まってしまう。そしてはっと我に返り、慌てて頭を振った。

「絶対、嫌」

きっぱりと言いつつ、瑛士を軽く睨みつける。

案の定、瑛士は私を見つめたまま、くつくつと笑い出した。ちょっと待って、私からかわれてる？

「いつか見たいな、彩乃の泣き顔」

「見せません」

「なんで？ 見せてよ」

「ってか、なにこれ。小学生の会話？」

めちゃくちゃ低レベルな会話をしているのに、瑛士と話しているうちに心が浮き立ってくる。まさか三十路を過ぎたところで、こんなに学生ノリで楽しく話せる相手が現れるとは思わなかった。瑛士のからかうような愉快な表情がそのまま私にも移り、くすく